花暦　　～　一期一会　～

a2200624　　西川　藍

● 制作意図

両親は私の名前に、植物に対する慈しみの心を持って欲しいという願いを込めた。
これまで様々なことを学び経験する中で、私は改めてその意味を考え、自分なりに解釈した。
人にとっては小さな、弱い存在にも優しくあって欲しい。世の中の様々な人や物に慈しみの心を持って欲しい。そんな願いを込めたのではないか。
だから私は、植物という代名詞を通して今まで出会った人や物について考える。
今までの出会いに感謝し、大切にする気持ちを忘れないようにしたい。
四季の花を、この学校で学んだ蒔絵の技法を用いて描くことで、このような今の自分の想いを表現したいと考えた。

● デザイン

縦横13㎝の24枚のプレートに、四季の花を描く。
一種類の花を二つのタイプで表現する。
額に飾る際、付け替えが簡単に済むようにプレートの裏に磁石を埋め込む。
一枚を飾るための額と、展示する際に全部のプレートを飾るための額を作る。
プレートを収納するための箱を作る。
額と箱には加飾はしない。

● 制作工程

1.24枚のプレート切り出し
2.裏に磁石を埋め込む部分を彫る
3.馬をつくる
4.木固め
5.磁石を埋め込む
6.布着せ
7.布目擦り
8.固め
9.呂色塗り
（5.～9.：裏）
10.下地2回
11.下塗り
12.追い錆
13.中塗り
14.追い錆
15.上塗り
16.置き目取り
17.加飾
18.額を作る
19.箱を作る

2007年度 卒業研究ゼミ発表要旨集

● 考察と感想

24枚のプレートに加飾を施すという作業は、決して楽ではないし、時間がかかることは分かっていたつもりだった。しかし予想以上に下絵の完成とプレートの塗りの完成が遅れてしまい、その分加飾を始める時期が遅くなり、かなり苦しい思いをした。
それぞれの花の特徴を考えながら下絵を描いていくことは、思っていた以上に大変な作業で、またその絵に合う加飾表現を考えるのも、とても大変だった。しかしその過程で、漆の様々な可能性を更に知ることができたのは、自分にとって良い経験だったと思う。
今回、色々なことを想定した制作の計画を立てることが大切だと痛感した。理想に近づけるために塗ったり研いだりを繰り返すのは、自分にとって楽しい作業だった。しかし同時に、限られた時間の中で作らなければならないとき、今の自分の力を良く考え、時間を使う必要があると強く感じた。そしてそれは妥協や諦めではなく、自分について理解することだと思った。
そして漆を扱う難しさと、だからこその達成感というものを改めて感じた。
素材によって、また技法によって違う表現の面白さを知ることが出来たこの２年間は、自分にとってとても充実した時間だった。